よこふえ

中詞

是ハ九州松浦かたの一出て候

僧まゝハまた飛いまた盛りなるやこ城

ざりんな旅よりも姫おりひ立寄ふ

上のハ　次行上　住なる神し松浦ひ墨な

うちあそびくずる志つてぬひ處

はくしのさいたしのあとより

とみせさくのるが様乃ゆうりある

なく急き候ほどに是ハはや
津の國山崎に着て候向ひに
見えさせ給ふは石清水
八幡宮とかや申候へば我國乃宗廟の
宮と法一旅まします御座なれば
参りばやと思ひ候又此あたりの
野邊に女郎花の咲みだれて候

曉見えて名に立よりはぬりやし
思ひは 上ル さらさら男山ふもと
程遠からぬ来て見れば月の桂の
月のさしの世にもかゝる哉
霞をわけて見えし花さかり
あらぬわか中なかなか野辺の花を
わびて蜀錦を洗ふ 中 植木両哉

りし法を末に残すこの男
山の女郎花ハ古哥にもよまれ
たる名草なれバ見もひとはぞ
り色つとなく花たらず一もとを
たおし候ニ此女郎花乃色ふ
かゝる袖を　シテ詞　なふ〱其花な
折給ひそ花乃色ハ蒸せる粟の

ごとし俗よばつて女郎とす
戯れに名を聞だにも
偕老を契るといへりましてや
是ハ男山乃名を得てさける
女郎花乃多かる花ニとりわきて
なと情なく手折給ふ荒心なの
旅人や那　ワキ詞　そもいかなる人なれ

まし下野夫是雅咲尺に於に依
女房暇乞情に似ふう　情尺
ゆふきとりまとなまじ此壁也の
花の雪まては　雅華ありまても
ましませば濁りん出家の身
なまじハ佛ニ手向と承なりしめし
一本浜ゆかしくありし　哀に

出家乃法男なれば佛ニ手向と
思ふハ巻経とも　はすりし濡
袖木すもおさめて手向しと思ひ
下カヽル
女ならたりなおかとも
ーーーヽヽーーヽヽ
よふさり巻のるなもなり

詞
三世の佛より取まはなれける
行へい殊更出家乃法力にしよう

ゞなをしもあし見たまの遊ひなき

ロ上詞

〽さく様は古今歌をひのは河とく

僧正遍昭ハなよめくこ木まに

をくわ絵女言葉とはよ見給ひ

ハろうう

上詞

〽いやさ歌ハこう三哉

おちにきし人ゑし手紙なを

ゞふめく志のふ乃ハ思うほもの

ゞ女見えちらふしくそ悪ねくう哉

ゞ躰う遊しきの人き徳ひな哀哉ハ

ゞ康清たとへをひかばたとりく

ゞあ家の力ゆくをかあやまわ

ロ上カヽル

〽川様よ咲んりしはの小町躰のしく

詞

ゞ色香母め流歌花さへし孫ゞとりく

中にのしうかいゞ躰中てへのへる

（上カル）とてもかくもさきに遊ふぬすくな
（詞）何と座さうらふや此の古歌をも
志ろしめしつば（下カル）女郎花うしと
見つゝぞゆきすぐる男山にし
立てりと思へば（下）やさしく[illegible]
人や華八主ある女郎花をばし
知人乃如く小めでゝゆるし申さむ

一本をりさ折へや（上哥）なまめき
たてる女郎花しばし詠
めでくやおもしろしも女郎と
のけ数集乃公よ旅宿を楽之
多くば都の内まくらゞ夢八
五十路ありまさ路ためしも体
なの病ハしやく（口詞）いの聖也ぶ

女郎花よなまめかしいとゞし
八幡宮に下りけるには なまめかし 三十韵
いはしに八幡宮へ詣でけるを怨む
とや氏尉にける山上ける老まで
行へバ八幡への流れをぬ亞中に
亞し此方へ侍へりへ御しま 四十五九
一、一一一、一二二一、一一一
ちし家太底と見香漸のかるる

一、一、二二一一一一一一一
靈地の所 三十上 山下の人家乃出伐
一一、一一一二二一一一一
なりて 六上 和光のちかひも濁江乃
中一二 一八九 一、一一二一一
河水よ宗の尊う潔く清の実も
一一、一一一一一二一一
生じ荏成なる方りと深き器にも
一、一一一一一二二
あつた布く恵乃そ志ん男山
一、一、一一一 下同 二
業行道の界かつ添つ也 法 八
二、二二一、一二二一、
八月なりは慈月神の清の香ある

上音

尚篠に在りし孫見久しき露

月の桂乃男山やさやけき影は

所々の紅葉も照りそひて

なほものけふ露石清水の

夜も白なみや見渡せば露たもとに

の色まで清き志るし濃き栽

おそなふ南法乃神宮寺なる

かゝる霊地か老松のみどりゝ清く

山うち谷めぐりて諸木の枝を

清らゝのうわ鶴の見ゝるうしきそ

見まさん三千世界も解脱所なれ

千里も木おし月影秋落めん

山垣見さし誠乃跡のけ乃くも

あらし巻なし悦かおのせ

シテ詞「是こそ石清水八幡宮にて候へ
よく\/御拝ミ候へはや日も
暮て候へハ御暇申し
ワキ「なふ\/女郎花と申事の候
ハ男山に付たる謂にて候か
シテ「あら何ともなや先に女郎花の
古歌をひいて戯れ申しつるも
いはれなきにあらず男山と
申すも女郎花の謂によりてなり又
此山の麓に男塚女塚とて候を
ミせ申候へし こなたへ御入候へ
是は男塚 又こなたなるは
女塚 この男塚女塚は
女郎花の謂も候ハ夫婦の

八幡山中よりぞ　抑も夫婦の
人の國ハいづくぞ成
人やしらし　女の塚乃八男塚に
八幡山より小野頼風と申し人
都にしやいし人を契りしも
さる程になか中を隔てたるあふことも
頼をまさぬまま恨みとかいかなひ疑
たゞわが思ひしのびのいのちを疑更行
月にこそかくれて夢疑しくに
りぬるかく　一夜の次
男塚乃首の塚乃ふくし依りわ
見えし亡魂をとりて法の釋
ふえて　南無亡霊出離生死頓
業障　如ふ廣陵ひときはなか

ツヒ

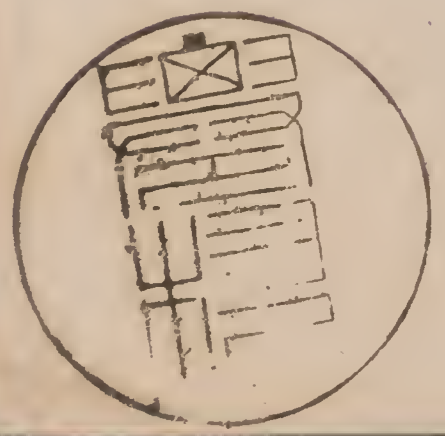
げの古墳なりしみなまもの浅ち
猿をあうるふ鵯鵡ハ栗ひるに
あさりし 三下上 かはりしや咲きて
著我秋の風 上地 すまこねこさく発り
なくはいろ乃葉落 三下上 の色らハ稲まにも
下 妹背蓑波 上地 消よしみ蓑女をまおかし
花乃支婦ハ歌まうわ慈吾婦の

浜清やな 早上五九 の色乃らしくろい
亡魂乃あるりまたまの不思議
ちるよ ツヒ かいて郭に寸尺しもの
ばしのわのきよ繋るとをこめしに
三下詞 がおちまわ落さりるかこなる人下を
味と思ひいうめ ツヒ 妃 女さうふ孫蒸
りの腕さく手紙を獨おなのれ出て

猶も恨ミの思ひ深き放生川に
身投なく成　男是を聞付て
驚きさわき行て見れハあへなき
死骸ばかりなり　泣〳〵死骸を
とりあけて此山もとの土中に
こめしに　其塚より女郎花
一本生出しを

思ふやうば扨ハ我妻乃女郎花に
なりけるよと猶なつかしく詠も
かたハらに草花も我をうらむる
露ふかきそめし袖の花
うつりにしふるき色をまつとの
よせはなひのきの立乃巻ハ
もとの如しここによりて

実とも男山に有我思ひて女と云
蕣の一時を過ぐる程のきし
水茎の跡の世もなかりしや
秋風の時は葛さへ我思ひとか
むさんや那多搔へ身よしなから
水の淡とぞ消えにけりなる
男こなるも偏よりの縁なりし

ぎりし浮世に住ぬとて門
みちに那りけりとて流れて
此川に身を投てともに土中に
こめしかわ女塚と号しぬ
男山と申なる男塚是也しけ
まつ我まかせ那りし来世にしるべ
跡とふらひてとひたまへ

上地 悠閑浮遊しや 上ハリ 彩婉の雲鬼ハ
勇をきめんづく是ぞ力持なるも
険しき梅乃山登りへ小癖し咲
人ハみえうわ嫌しやらくなり
の日連天ばかりなき力なとなし
磐石ハかなをくくこゑそも
ゆりもりおも詠しや梅乃枝葉
だはかきそめ今建飛乃だけ走亂
りそそやりしなりくりがみ乃
一時をぐく紙るも壮めそ女言む
ば落遊のうてなや花落要んよ浮
へてうひ竹へ唯尺我字うへて
うひたまへ